

内山完造研究会報告④

内山完造と日中友好運動

大里 浩 秋

はじめに

この小文は、内山完造さん（以下完造さん）が1947年に上海から帰国して59年に亡くなるまでの10数年、日中友好に尽力した足跡をたどるものである。これを読んで、完造さんの日中友好への熱い思いに触れ、彼の残した発言や行動の数々が日本における日中友好の取り組みの今後にとって、貴重な教訓を含んでいると感じていただければ幸いである。

順序としては、先に、敗戦により中国から帰国するまでの完造さんについて簡単に触れ、その後帰国してからの、とくに50年以降の活動を時間の順に詳しく取り上げることにする。

中国に渡る前後

完造さんは、1885年岡山県芳井村（現、井原市芳井町）に生まれ、現地の小学校に入ったが、12歳で高等小学校を中途退学して、大阪の商店ついで京都の商店の奉公人となり、とくに京都の店には27歳まで10年余勤めてその間苦勞しながら店を切り盛りした経験があり、その経験は定めし中国に渡ってから大いに役立ったと思われる内容である。（彼の自伝『花甲録』、岩波書店、1960年を参照。以下の記述も主に同書を参照する）

1913年、28歳の時参天堂の「大学目薬」上海出張員となり中国各地を宣伝・販売して回り、30年までその職にありつつ夫人のみきさんが開いた日本の本を扱う内山書店を手伝い、その後は店の運営に専念して上海を代表する日本書専門店へと発展させた。在住の日本人のみか日本留学帰りを含む中国人も多数利用する店になり、完造さんは店を日中文化人が交流する場としてその世話役に任じた。彼が交流した中国人の中でとくにその関係が知られるのは魯迅であり、27年に広州から上海に移って内山書店の近くに住み本を見に店に顔を出したことから知り合いになり、36年に亡くなるまで陰に陽に魯迅の身を守ったのは完造さんであった。中国で完造さんがよく知られるゆえんである。

『生ける支那の姿』に込めた思い

彼は中国各地で大学目薬を売りながら、さらには上海で内山書店を運営しながら、接した中国人から得た興味深いネタをもとにして数冊の本を書いている。最初に出したのは『生ける支那の姿』で、その序文を綴っているのは魯迅である。魯迅は、「著者は二十年以上も支那に生活し各地方に旅行し各階級の人々と接触したのだからこんな漫文を書くには実に適当な人物であると思ふ」とほめた上で、「併しもう長い間の「老朋友（ラオポンユウ）」であるから悪口も少々書き添へて置きたい」として、「支那の優點らしいものをあまりに多く話す趣きがあるのでそれは自分の考へと反対するのである」云々と書く。いかにも魯迅らしい言い回しで完造さんは中国をほめすぎていると述べながらも、漫談の出版を喜んでいるのが感じられる文章である。

ところで、この序文を読んだ完造さんはすぐに魯迅にこう言ったというのである。「いや私は中国の

優点や美点ばかり拾うて居るのではない。日本ではあまりに知られて居らんことを書いて来たのです。……もしも私の書いたことがことごとく中国人の優点美点であるに見えるなら、従来日本に伝えられた中国人の生活は、その反対である醜いことや劣った点ばかりが伝えられて居たと云うことになるのではあるまいか」（『三分の弁』、『花甲録』所収）。そして、完造さんのこの言によって、戦前『生ける支那の姿』以降に次々と公にした『上海漫語』など六冊も彼のこうした思いから書かれたものであると気づかされることになる。

戦時下と戦後直後の雑記

さて、完造さんは筆まめで時間を見つけては何やら書いていて中国滞在中に書き溜めた雑記類は相当数あったが、そのほとんどは持参できないまま送還されて、帰国後に入手することができたのは44年から46年までに書いたうちの飛び飛びの内容だけと本人が記している（『古ノートから』、『花甲録』所収）。そして、保管している完造さんの甥の内山籬さん（東京・内山書店会長、以下籬さん）の好意でそれらを見せていただくと、たとえば44年6月の雑記中に、「いさぎよく北・中・南支を放棄して満洲を守れと云ひ度い。満洲さへ守れば日本の人口問題は解決出来るのだ」という表現に出会うことになる。完造さんもその頃そんなことを考えていたのかと受けとめるしかないのであるが、その頃から敗戦を経て、中国側に留用されて上海に留まり、在留日本人の引揚の世話役に任じつつ、なお書店を再開させたいと熱望していたが、ついには強制的に送還されるまでの経緯については、神奈川大学の研究助成を得て数人で進めている上述の雑記類の整理を経て、多くのことが明らかになりつつある（本所報No. 64, 65参照のこと）。

ところで、完造さんが日本に持ち帰れた雑記類は44年から46年までのとびとびの記録だけと書いているが、最近の籬さんによる資料整理で45年から47年までに原稿用紙に書いた、人前で話すために準備したと思える文や、日頃考えたことを取りあえず書きとめたと思える雑記風の文がまだかなりの分量で存在することがわかって、これらの解説・分析も今後の課題に加わったことになる。

『花甲録』の執筆

『花甲録』は、出生年の1885年から還暦を迎えた1945年まで、60年間の日本のさまざまな出来事のある年表から抜き出したものを枕にして、それに完造さん個人の時々の動きや考えたことを書き加えて自伝風にまとめたものである。しかし、1949年末から50年末までの1年でまとめたとのことで、それを執筆した50年ごろの彼の思いが色濃く反映されており、45年までのそれぞれの年に考えたそのものでない点があることに留意する必要がある。たとえば、先に触れた戦時中に書いた雑記にも政府の政策批判があるものの、『花甲録』に書かれた政府批判は一層厳しい内容になっているのは、思っても言えなかったことを戦後になって吐露したということもあろう。また、戦時中に日本人は満洲に本気で定着すべしと力説している点については、戦後その考えが日本の中国侵略につながるものだったと深く自省したに違いないとしても、『花甲録』では触れていないのである。とまれ、戦時中と戦後すぐに書いた雑記類を読むことができ、上海から引き揚げて数年後にまとめた『花甲録』も読むことができることで、完造さんが日中友好の活動に入っていく前座の状況をかなりの程度に知ることになる。

1948, 49年の「全国行脚」

なお、『花甲録』には1947年末に上海から引き揚げてから亡くなる59年までに書いた複数の文章がうしろに収録されていて、そのうちの「構想」と題した一文に、48年2月から「延べ日数十七カ月」をかけて「全国の各地に居る友人知己が来い来いと云うてくれる」のでその誘いに乗って各地で講演して回ったことを書いている。

また、この全国行脚については、58年になってからこう回顧しているのである。「これまで新聞や雑誌に書いたり、単行本で出版したことがあるが、こんどは一つ口から口へ伝えることをして、日本人にほんとうの中国人を、中国を知って貰うことを決心した。……始めてみると実に愉快だ。日本人の中国人を知らんことは、魯迅先生が看破している通りである。私は懸命の力を集中して、中国及び中国人の実情を訴えた」（「自ら省みて恥かしい」、『アジア経済旬報』793号、1970年6月に収録）。実は、完造さんが各地で講演するのは上海から引き揚げて以降に始めたことではない。1944年の雑記を見るだけでも、出張先の満洲でも、日本に戻って故郷に滞在した際にも、さまざまな対象者に講演しているので、日本で講演旅行をするのはお手のものであり、自らは「漫談」と称した行為がまもなく日中友好協会での活動にも生かされることになる。

国共内戦、中華人民共和国の成立について

ところで、完造さんが全国行脚を展開している頃に、中国では国民党軍と共産党軍による内戦が次第に共産党軍の有利な局面に変わりつつあり、そうした情勢の変化に注目していた完造さんは、青い鳥を求めて探し当てたと思ったらその鳥が黒い鳥に変わったというメーテルリンクの童話に結びつけて、次のように書いている。「今や中国には共産主義なる青い鳥が南へ南へと飛んでゐるのである。恐らくは其の中〔うち〕に、共産主義の革命が成功するであらうと思ふ。そして此の青い鳥は果して天下に号令する時に青い鳥であり得るであらうか。必ず三民主義よりもより近い色の鳥に違いないと思ふが、それが……真に青い鳥であるとは断言する勇気がないのである」としつつ、また「易世革命とは悪政が善政へ進化される常道であると信ずる私は、今次の革命が成功すれば必ず、より善き政治への進化が現れるものであることも亦た信じて疑はないものである」とも記す（「小序」、『中国四十年』、1949年、羽田書店）。こうして、自らの30年の中国での見聞を各地で紹介する旅を続けた後に、中華人民共和国の成立に出会うことになる。

そして、毛沢東が北京天安門上で中華人民共和国の建国を宣言する前日（1949年9月30日）、中国人留学生が組織する「留日同学総会」が発行する機関紙に、完造さんは、その結びに「眠って居た獅子の眼醒めたことを、私は其れこそ東亜の平和の曙光であり、世界平和の黎明であると心から喜ぶものであるが、同時に其眼醒めた獅子の猛威は私の非常に怖るゝものである。剣によって興った日本が剣によって亡んだ事実と、最悪の平和も戦争に勝ると云う言葉に真理を認めて、新しい中国に望むこと然り」とする文を寄稿している（「新中国に望む」、『中国留日学生報』第37号、1949年10月15日）。それは、日本と中国の今後の関係を冷静に見つめていこうとする姿勢を感じさせる文である。

以下は、1950年2月に第1号が発行された日本中国友好協会（以下、協会）の機関紙『日本と中国』の最初期に載った記事を頼りに、年度ごとに完造さんの日中友好運動との関わりを自ら語ったこと、自ら書いた文を主に拾うことで紹介する。ことわらない限り『日本と中国』からの引用であり、その号数とタイトルのみを記す。

1950年

1月12日、在日華僑を含む各界200名が結集した協会の準備会発起人総会に参加、常任幹事に選出された。また、協会結成に向けて求められたアンケートに、協会で取り組みたいことは「青年層に正しい中国認識を与えること」、中国に何を望むかの問いには「友好と貿易」と答えている（第1号）。3月に設定した「日本中国友好週間」においては、杉並支部準備会の「中国問題を語る会」では「解放後の上海」と題し、千代田支部準備会では「上海漫語」と題して講演した。結成に向けた準備段階で早くも中国をよく知り語りなれた者の本領を發揮したというべきか。

9月30日、10月1両日に結成大会を開き、正式に協会が成立した。綱領としては「日本国民の誤った中国観を深く反省し、これが是正に努力する。」「日中両国人民の相互理解と協力をうちたてるため、両国文化の交流に努力する。」「日中両国の経済建設と人民生活の向上に資するため、中日貿易の促進に努力する。」などを掲げた（第6号「結成主旨」）が、それは結成以前から完造さんが主張したものと合致していた。彼はこの大会で「中国を語る」と題する講演をし、理事長に選出された。

1951年

1月に「信ずる生活へ」を書いている（第8号）。「日本の社会が疑いの生活に投げ込まれている」現状にあるとし、「その私の考へで今日の世界を見ると矢張り世界の各国がお互いに疑って居る。……疑いは戦争の根底であり、信じて〔こそ〕和平は成功するものである。」として、こうした現状を百八十度転換しなければならないとする。具体的な事例をあげてはいないが、そう述べることでGHQによる中国側資料の利用を禁止する政策や日本政府の対中国輸出禁止強化、さらには戦前から改まらない日本人の中国人蔑視など、改めるべき各種の現況への批判の意を込めたものと受け取れる。

3月日中友好の立場で設定された「講和問題懇談会」において中国を加えた全面講和をすべきと主張し、その後サンフランシスコ条約が中国抜きで結ばれ、条約が国会で批准されようとする10月の段階では、中国研究者による国会への意見書に名を連ね、さらに日中友好文化人による条約反対声明作成に発起人の一人として参加した。また、9月には魯迅・ゴリキー逝去15周年記念講演会で、「人間魯迅を語る」と題して講演、魯迅の命日にあたる10月19日には彼の司会で「魯迅をしのぶ会」を開き、さらに、強制連行されて秋田県花岡鉱山で働かされ我慢の限界から決起して多数が虐殺されたいわゆる花岡事件の犠牲者を追悼する会の準備にも協会代表として関わり、12月1日に「花岡犠牲者慰霊祭」が実施された。その他、ここには紹介しきれないほどの活動に参加し、協会理事長としてあるいは個人として、日中友好推進に向けて全力を傾ける完造さんの姿があった。

1952年

2月、前年に中国不参加の講和条約を結び、さらにアメリカの後押しで台湾との平和条約を結ぼうとしている政府に反対して、中国との友好提携に関する文化人共同声明に署名。また同月、上海時期に交流が始まり、帰国後も日本で交流が続いた医学者で作家の陶晶孫の告別式に参列した。4月には協会第2回全国大会で理事長に再選され、「第2回大会を終えて」を書き、「この大会における出席者の叫びが悉く“日本人は東洋平和の中心である四億七千万人の中国のほんとうのことを知らん”、だからわれわれのいう日本と中国との友好ということが少しも解らん、そこで何よりも先ずほんとうの中国を知らせなければならんということがいわれたのである」とし（第24号）、「わが同胞の中国観の是正」をめざし「われ等はただ真一文字に世界の平和を望んで日本と中国との友好回復に邁進するのみである」と決意表明している。6月日中貿易促進会議の司会を務め、7月には上述の決意を実行に移して、5日から16日までさらに23日から31日まで、連日九州各地を講演して回った。また、9月に設けた日中友好月間では、両国の文化交流をめざす「日中友好会議」で司会を担当、10月魯迅祭実行委員会主催の魯迅祭で講演、11月には奈良支部の日中友好の夕で「古い中国から新しい中国へ」と題して講演した。

1953年

「年頭の辞」を執筆、「東洋平和の、世界平和の根本条件として日本と中国との講和を結ぶことが絶対に必要である。この絶対必要には日本と中国との友好ということが其根本問題である。即ち今年こそは断じてこの日本と中国との友好を獲得しなければならのである」と述べる。中国の存在を無視したこの間の政府の外交処理に対する、強い抗議の意志を込めた発言である（第39号）。

また、前年冬から関わっていることに鹿地亘事件がある。鹿地は1930年代にプロレタリア文学活動に参加した作家で、治安維持法違反で逮捕投獄され、出獄後上海を経由して国民党政府の了承を得て武漢・重慶で日本兵捕虜の組織化に従事して日本人民反戦同盟を名乗っていたが、完造さんとは上海で知り合い、帰国後に至るまで親密な関係にあった。その鹿地が51年11月にアメリカ軍秘密工作機関に拉致されて文化人として協力するよう強要されたが、52年12月にかろうじて解放されたことで、完造さんを中心に解放後の鹿地の身を守る救援会を組織したのである。

他に、この年完造さんの役割が存分発揮された事件として、戦後中国側に留用されて各地に留まっていた日本人の帰国問題があった。前年12月に中国政府関係筋が国营通信社である新華社を通じて、帰国を希望する在留日本人は出国を申請し、中国側の証明を受ければすぐに出国できると伝えてきたことから、協会は国内の関係分野と対応を協議、国交のない中国からの帰国の手続きを進めるために中国側窓口である紅十字会と話し合う民間団体が必要だとして、赤十字社の島津社長を含む7人を派遣することになり、その中に協会代表として完造さんも選ばれて、1月末に訪中した。

訪中する直前に出席した総評の大会で、「同胞の帰国は、ほんとに皆さんのような団体に、力をかして頂きたい。日本と中国の友好は、私たちが微力であっても、私たちはやり遂げたい。日本の政府はろくなことができない。四億七千万の中国と講和を結ばず、僅か七百万の台湾政府と講和を結ぶ吉田政府の猿芝居をはぎ取らなければならない」と発言（第41号）、出発に際してのあいさつでは、「日本人三万人の帰国ということが中国紅十字会の担当で実現されることになり、……私の全力をつくして此任を果すつもりでおります。……ただ今の私の心は、一人でも多く一日も早く帰って頂くことが出来ることをのみ祈りつつ出発いたします」という「出発にあたって」という文を発表している（第40号）。

47年12月に帰国してから約5年ぶりに中国に渡った完造さんは、滞在する先々で聞いた情報や見聞について書いているが、そのうち『日本と中国』に載った内容としては、出発当初に香港から国境の町深圳の駅に着いた時の関係者の対応や広州街中の賑わいぶりを伝えており（第42号）、北京では散髪しようとしてその代金を人に聞いたらその高さにびっくりして、それではバリカンを買ったらいくらになるかと専門店に出かけて一番安いバリカンを買って自分で散髪してみたという話題に始まり、清華大学を見学して説明してくれた若い教授の熱と希望に満ちた話に「イヤハヤ青年中国の意気はたいしたものである」と感じたことを紹介しており（第43号「バリカンと中国」）、さらに、北京で古くからの友人欧陽予倩、田漢、魯迅の夫人許広平、郭沫若などに会い、「今度お会いした此等の人々が実に潑らつたる若さを持っておられることに驚きました。流石は青年中国の指導者である」と記しており（第44号「青年の中堅」）、全般に新中国の誕生に好意的な印象を持ったことを感じる記述になっている。他にも、『花甲録』には北京滞在中に書いた6篇の体験記と帰国後に中国側との最終的な対談で日本側がこだわってなかなか話がまとまらなかった内幕を書いた「最終会談」を収録しているが、ここでは「最終会談」のみに言及する。

その文によると、日本の当局は、日本人の帰国時には3団体（日本赤十字社、日中友好協会、日本平和連絡協議会）の代表が各船に必ず乗船すべきことと、帰国する日本人の範囲は「中日結婚者の帰国に当っては両親または片親の同伴する二十歳以下の未婚者に限って入国させるが、それ以外の人間は逆送還する」と主張しており、中国側が考える「中国側では成年は十六歳からであるから十六歳以下の者は両親の意志にまかせるが、十六歳以上の者は本人の意志にまかせる」という点と食い違い、そこで日本側代表団としては食い違うままでの同意を求めても日本政府の承認を得られない状況になり、代表団内にも意見の対立を生じることになった。しかし、時間切れに追い込まれた状況で最終的には食い違いを黙認してコミュニケに署名をして終わったという。完造さんとしては何よりも3万人の帰国を優先することを主張していたので、その考えがぎりぎりの時点で通ったことになるが、代表団が帰国してすぐに各自外務省に呼ばれてコミュニケ締結のいきさつを尋問されたというのである。

とにかくどうか留用日本人の帰国に関する中国側との話がまとまり、3月に帰国した際に開いた代表団帰国報告大会でのあいさつで、完造さんは中国に出発する前後の政府の非協力ぶりに触れ、声を大にして「もし今のような政府の態度でこの帰国が遅れるようなことがあれば、そのすべての責任は政府にある」と叫び、時間も迫り完造さんの話が終わろうとすると、聴衆のもっとの声がかかりあと1分あと3分と続けられたとする（第44号「数千の会衆感激、代表団帰国報告大会」）。残留日本人帰国に対する周囲の強い関心を感じさせる場面である。まもなく3万人の帰国が実現するが、政府側の受け入れは不十分なままだったことが『日本と中国』に繰り返し指摘されている。

1954年

松田竹千代（日本自由党代議士）、木村荘十二（映画演出家・帰国者）との鼎談で、日中友好運動の草分けとしての苦心時代の思い出を聞かれた完造さんは、「はじめは、当時の一般の空気が「貿易」という声が強くてね、それで貿易の促進会を作って、これを超党派でやろうということにしたところがこれを共産党が支持するというようになってわたしが講演にいくさきざきで、じゃんじゃん宣伝してくれている。これでもう不景気なんか一ぺんでふっとんでしまうというような宣伝の仕方だから、講演会のきき手は多いんだが、あとに懇談会なんかすると肝心の業者の方たちはさっぱりいない。どうも共産党の宣伝がひいきのひき倒しになっている。それにもう一つは中国は何からかから共産党一色だときめてかかってしまっているから、講演会のたんびにその弁明役をしてみわっているようなもんだった」と語っている（第64号「新春鼎談」）。党派の人の無理解に付き合い、さらに決めつけたような中国の現状理解をする周りの人に辛抱強く説明する、無党派で中国をよく知る完造さんの嘆きが思わず吐露されたというべきか。

6月北海道37町村で講演。7月第4回全国大会で副会長に就任、全国各地で絶え間なく講演活動したことへの敬意を表して満場の拍手のもと花束が贈呈された。大会中急性胃炎で倒れ、高血圧と糖尿と診断されて一時静養したが全快し、8月は若松市、9月も三重、四国で講演した。また、9月には「だ捕海面の正確点」を執筆、前年来中国側に拘留されたとする日本の複数の漁船は、日本側の主張では公海での漁でだ捕されたとして中国に申し入れたが、釈放後完造さん自ら漁船員に聞いたところでは、すべて中国領でのだ捕だったとのことで、「漁業問題解決の第一歩はまず日本側でこのだ捕の海面を正確に知るということである」と主張した（第88号「だ捕海面の正確点」）。

10月末から11月上旬にかけて李徳全団長、廖承志副団長を始めとする紅十字会代表団の来日に尽力した。前々年来在華日本人の帰国に向けて世話をしてくれた彼らを日本に招くことは前年に約束していたことで、協会を含む多くの人々の取り組みと国会の決議を経て処理を渋っていた政府に認めさせることで実現したものだ。完造さんは前年に実現した日本人の帰国について、「まだ戦争状態の継続している中国と日本との間に、しかも日本政府の非友好的な態度にもかかわらずこんな感激的な事が実行されたということは、必ず将来歴史上の華となるに違いないと私は思う」と書いた（第94号「われらの心がまえ」）。

また、55年に出版した『平均有銭——中国の今昔』には、いまだ帰国が実現していない留守家族の代表団がこの時廖承志に陳情した際、そばに付き添って感じたことを書いている。家族は私の子供を帰して下さいとか私の良人を帰して下さいと要求するのに対して、「廖先生は終始温かいやさしい態度で、ハイハイ出来るだけ努力しましょう」と答えているのであるが、そういう問答を聞いて「私はこの代表団の中から、一人でもよい、イヤたった一言でもよい、個人的な感情、而も自分の都合ばかりを押しつけないで、丈夫で居るのでしたらドウゾ一生懸命に働らいて呉れ、その中此方から出かけるよ（中略）とでもいう様な言葉が聞き度かったが、遂に一言も聞くことが出来なかった」とし、「日本人は理性の導きを忘れて居るのである」と書き加えている。

1955年

新年の抱負を問うアンケートに、完造さんは「中日の友好はまず中国を知ることによって、これが徹底こそ為さねばならんことである。今年は一層これが徹底のために働きたいと思う」と答えている（第100号）。彼は中国を知ることの大切さを強調しているのだが、政府の新中国への否定的な対応やそれに呼応する一部マスコミの報道を批判する意図をここに込めていると受け取れる。そして、6月から7月にかけては岡山県下9か所19会場で開いた日中友好講演会で話し、さらに7月には、京都各界代表との懇談会に出席して、その席上「いま日本では、カギをかけないと泥棒が入る云々といって再軍備をとこなえているものもいるが、カギをかけない世界にしよう。中国のいう平和を素直にうけいれ、われわれの新日本を建設しよう」と語り、参加者の三分の一から協会に入会する意向が示されたとする（第120号「内山完造氏の話に感動」）。また8月には、広島の水爆禁止世界大会に出席し、「集った老若男女の代表は水爆禁止を必ず実現させるという意気に燃えた人々でありますから、三日間の大会が火を噴くような叫びとなり地を裂く様な訴えとなったのは当然であります」との感想を記している（第122号「水爆禁止世界大会に出席して」）。11月にも、10日間長崎県下で7千人を超える学生を巡回講演した。

11月に開催された東京都連合会第4回大会では完造さんが会長としてあいさつしたことが記事になっている。その結成時に中心的に関わったことは50年初めの記事にあったものの、いつから会長に就いたかはその後の『日本と中国』には触れていなかったが、この時協会本部の要職に加えて東京都連合会の会長も兼任していたとは、余人を以ては代えがたい存在であったことをますます感じさせる事実である。12月には、中国科学院院長郭沫若一行を日本学術会議茅誠司会長が招請して来日を実現、完造さんは郭と上海時期から懇意にしていた関係で、接待に務めた（その際の様子は『花甲録』所収の3篇にも記されている）。

1956年

7月に開いた協会第6回大会の後に「第六回大会に学ぶ」を執筆、「われわれの運動は平日のお茶漬け運動とお祭りの御馳走運動との二種があって、従来各地ともにお祭りの御馳走運動に偏っておったように思われます。この欠点を反省してこんごお茶漬け運動と車の両輪となって行かねばならんものであることが本大会を通じて私には感じられました」と書く（第155号）。独特の言い回しながら、地道な活動の積み重ねをもっと重視すべきだと主張したかったのであろう。8月再度理事長に選出され副会長兼任となる。

また8月には、許広平が水爆禁止世界大会参加で来日して、夫魯迅の仙台医学専門学校留学時の恩師藤野巖九郎の墓参りを希望して体調不良で果たせなかった折に、完造さんが彼女からの花束を持って福井県芦原の墓地を代理参拝した（許広平来日については、「許広平女史を歓迎する」を書いている。『花甲録』所収）。9月には、中国と日本の社会のありようの違いをどう感じさせるエッセイ「競争から協力へ」を発表、中国人の4人家族が協力して食事を用意する絵本を見て、「新中国が競争から協力へと革命された」ことを暗示している内容だと受け取り、「何んといっても日本の社会は競争の社会である……協力の種を培う社会ではないのだ」とし、「協力の世のなかを希望しているわれわれ自身の協力を固うして世に処したいものである」と記している（第160号）。

この年は魯迅の逝去20年に当たり、10月早大隈講堂での2千人の大集会を始め、国内数か所で記念行事が開かれたが、完造さんは数人の作家と共に中国における魯迅祭に招かれて参加し、その機会に2カ月各地を参観した。その際の見聞は翌年に発表した「開け自由交通の路」によると、行く先々で「目につくものは誠に大仕かけな赤煉瓦の建築」であった、また、一年に人口が1300万人ずつ増えていて食糧問題が大変で農業の発展が急がれているので、日本の学者技術家に是非来てもらいたいと要請さ

れたことなどを紹介するとともに、「かつて、中国での低い生活者と言えば、農工人であった。その数は中国人口中の最大多数であったことは、誰でも知っている。その最大多数の農工人の生活が今度の革命によってグット上がったのである。……しかもそれは外国を侵略してなったのではない。国内の革命によってである」と書く（第172号）。かつての中国を知る完造さんは、革命成って建設途上の中国を見てこのように高く評価しているのである（この時の中国見聞について、『花甲録』には2篇収録されている）。

1957年

2月の協会常任理事会で、他団体と協力して5月に「日中国交回復月間」を設定して全国で一大国民運動に取り組むことになり、さらに6月には「日中国交回復国民会議」の結成へと進んでいくが、完造さんはその先駆けとして2月末から3月にかけて中国、四国地方を講演して回り、うち岡山では県下9市3町を12日間かけて回り、四国は香川、徳島、高知3県を10日間で回った。そして、その経験を「舌の旅」と題して書いているが、興味深いのは、講演の内容に触れているよりも多く各地の風景や出会った人物、とくに移動の合間に旧知の人を訪ねたことに触れている点で、完造さんはこうした触れ合いを楽しみながら講演旅行を続けたのだと感じとれる文である。例えば、高松から海を渡って、「帰途長年の遺憾であった長島楽生園〔岡山県瀬戸内市にある国立ハンセン病医療所長島愛生園を指すのか〕を訪問でき、光田園長、塩沼博士等と懇談の時を得た。寒い夜であったが患者の男女に漫談もしたので肩の荷を下ろした思いがした。小豆島を遠望する水島灘の風景は絶好である。」と書いている（第179号）。また4月には、13日出発で月末まで神戸を振り出しに山陽から九州中部までを講演して回っている。

10月には協会代表として衆議院海外同胞引揚特別委員会に出席、日本に里帰りして4カ月になる千余人の婦人が中国に戻るに際して、政府は船を用意しない、便船を利用しろとしているのに対して、「里帰り婦人はあの戦の中で日本軍が保護しないでほうり出」した人たちで、「戦争の犠牲者であり、政府は一般帰国者に準じて援助すべきである」と述べた（第200号）。ここでも、戦後処理に進んで取り組もうとせず、帰国者には船を出すがり帰り者には出さないとする政府を厳しく追及する完造さんがいたのである。

1958年

1月12-17日に秋田県で講演、足ねんざで静養、2月20-26日にも秋田、さらに山形で講演した。その後、それまでになかったような日中関係の危機が重ねて起こり、完造さんもその対応に追われることになった。春に広州で開かれた日本商品展覧会に出店した一部業者が作成したカタログに中華人民共和国と中華民国の二つの中国が存在するとした表現があることで、協会理事長として「日中友好運動に従事するものの中国事情〔理解〕の不徹底に因るものであることが其の根本原因である」を書いて中国側に謝罪している（第212号「友好運動者の共同責任」）。3月四国ブロックで講演、15日帰京の予定と第213号の「消息らん」にあり、第216号の「消息らん」には、完造さんの「病氣回復」とあるが、その辺の詳細は不明である。

両国間の第4次貿易協定で認められたはずの日本における中国通商代表部の国旗掲揚の権利に、日本政府が国交を結んでいないからとして難を示したことに端を発して、5月長崎で開かれた協会長崎支部主催の中国切手展で会場に掲げられた中国国旗が右翼団体の一青年に引きずり下ろされる事件が起こった。そして、この事件をきっかけにすべての貿易契約が中国側に破棄され、その後60年まで両国間の貿易は中断されることになった。こうした状況下、5月20日関係諸団体主催の「日中関係緊急事態打開国民大会」の席上、完造さんは「友好交流の障害について」と題して発言、「個人的にも仲良くしな

ければ商売はできない。日本政府のは仲良くはしない、しかし自分の方はもうけるというものだ。人間の常識として考えなおす必要がある。戦争によっておかしな罪、その中で無理に押しつけた貿易、そんなものは道理がものをいう今の世界では通用しない。日本はアメリカのものでもなく、わずか二十人の大臣のものでも一党一派のものでもない。われわれ国民のものであり、日本国民の主権にある」と訴えた(第221号)。その後も日中関係打開の集会在各地でもたれているうち、完造さんは6月の福岡の集会に参加、7月の協会第8回全国大会では岸内閣の中国敵視政策が今日の事態の根本であるとし、「何よりもいまはずみつつある祖国を救うこと、すなわち、全国民的な救国運動こそ必要」と訴え(第227・8合併号)、副会長・理事長に留任され、8月には京都、神戸、大阪、9月には奈良、三重、滋賀、10月には宮崎、長崎、佐賀を講演して回っている。それまでに増して忙しく気苦労の絶えない1年であったと思われる。

1959年

2月「劉連仁氏を語る会——“穴にかくれて十四年”出版記念」に出席して、「劉さんをみたとき、これはまさに男の“白毛女”だと思った。日本人としてまことに申しわけないことだ」と発言している(第245号)。劉連仁氏は、強制連行で北海道の釧路で働かされている最中に作業場から数人で脱出し、山中に隠れて13年を経て唯一生き延びて発見された人であり、政府は当初不法入国者扱いして批判を浴びた経緯がある。4月地方遊説から戻って高熱を発し、その後結核と分かり治療に専念することになる(補足すると、「1月には大阪、広島、2月には岡山、3月には福島、宮城、4月には新潟、福井、石川各県を巡回講演したが、帰京とともに39度の発熱をして寝込んでしまった……」と『花甲録』所収の「別の冷汗」にある)。そして、8月の協会第9回全国大会では副会長の留任が決まり、近く中国人民対外文化協会から病氣療養に招かれて中国に出かけるのに合わせて“暫しの別れ”のあいさつをし、全参加者から歓送の拍手が送られた。

9月16日マサノ夫人とともに中国に向かった。その日、中国側に向けて用意した挨拶状には「中国ではまさに若返りの意気勇ましく西洋医との協力によって新々の医道を発展しつつある中国医術の治療をうけて実際に“人間七十やっど青年”を現実的に立証したいという希望に燃えて」と書き(第267号「用意されていた挨拶文」)、立派に病氣をなおし再び日本で友好運動に尽くしたいと願った完造さんであるが、北京に到着した19日の夜の歓迎宴に出席している途中で体調を崩して協和病院に入院し、翌20日午後8時40分に亡くなった。享年74歳、死因は脳溢血などいくつかの病氣に加えて疲労もその一因であると診断された。22日追悼会が行われた。200人余の故人の友人や各界の人が集まり、楚図南中国人民対外文化協会会長の司会で挙行され、京劇の名優梅蘭芳氏らも参列、中国訪問中の石橋湛山前首相からの花輪も飾られ、きわめて盛大であったとのこと。その後遺骨は前夫人みきさんが眠る上海のお墓(万国公墓、現在の宋慶齡陵園内)に埋葬され、11月16日日比谷公会堂で「故内山完造日中友好葬」が千名の参列者のもと厳粛に執り行われた。(北京到着後の状況は、『花甲録』中の「付録」を参照した)

結びに代えて

これまで、上海で日本の本を扱う書店を経営して魯迅を始め多くの中国人と交流し、敗戦で帰国してからはさっそく全国行脚をして中国を正しく理解することの大切さを語り、日中友好協会の結成に参加してからはそれを継続しつつ、先頭に立って戦争犠牲者の追悼や中国在留日本人の帰国、国交正常化、貿易の再開などに亡くなる間際まで尽力した完造さんの歩みを、十全な紹介には程遠いのは承知しているが、自伝『花甲録』や発刊開始から10年間の『日本と中国』の記事などを頼りに紹介したつもりである。この作業を通じて、完造さんが帰国後に中国理解、日中友好に精一杯かけた意気込みをひしひし

と感じるようになった。

さて、完造さんが亡くなって7年後の1966年には、中国全土を混乱におとし入れ、日本にも少なからずマイナスの影響を及ぼした文化大革命が起こった。さらに72年には、完造さんが率先して早期実現を訴えた日中国交正常化が実現した。こうした時代の変化について、さらにはその後の日中関係の変化について、完造さんならどう発言されたであろうか。今年（2022年）は国交正常化50周年に当る。

（なおこの拙文は、2020年の『日本と中国』7月号（第2242号）から12月号（第2247号）まで連載した「内山完造と日中友好運動」を基礎にして、訂正や補充を加えたものである）